

檀信徒各位

十夜法要のご案内

聖名 時下晩秋の候、専心聞法の好季節となりました。
今年も収穫の時期を終え天地の恵みを感謝する頃でもあります。
下記のように十夜法要を勤めます。

ご多忙の処とは存じますが、お繰り合わせご参詣下さいます
ようご案内申し上げます。 合 掌

平成24年11月上浣

無量寺 住職 堤 俊翁 拜

記

※期 日 11月23日(金) 勤労感謝の日

※時 間 午後1時より聖観世音菩薩開眼式、引き続き
十夜法要御回向(普通回向)

午後2時より^{ふじゅもんえこう}諷誦文回向(特別回向)、法 話

※布教師 大西 文生 師 (長崎教区 法樹寺)

※ご回向料

普通回向 1 霊 1,000 円以上

特別回向 1 霊 5,000 円以上 志納下さい。

初めてお十夜を迎える^{ふじゅもんえこう}霊位、又は特別に志される霊位、
布教師様による諷誦文回向です。焼香をしていただきます。
事前にお申し込みをお願いします。

※お供え米、お供え米料 随意志納下さい。

毎日の本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

※郵便振替等で申し込まれる方も位牌型をお送り下さい。

法然上人絵伝

第三巻第一段

進上文殊菩薩像 勢至丸、持宝坊に入る



第三巻第一段②

勢至丸は、菩提寺観覚上人のもとを離れ、比叡山西塔北谷の持宝坊源光上人のもとに送られることになった。観覚上人は勢至丸を送り込む時、源光上人に「進上す大聖文殊菩薩像一体」と書いた手紙を送った。これを一読した源光上人は、使者に文殊菩薩像はどうしたのかと尋ねたところ、文殊菩薩像など出発の時からないと答えた。

観覚上人のいうことは「文殊菩薩の生まれ変わりの少年を差し上げる」ということであろうと。それほどすばらしい子供であれば今すぐにでも会いたい。源光上人はすぐに迎えの使者をつかわした。

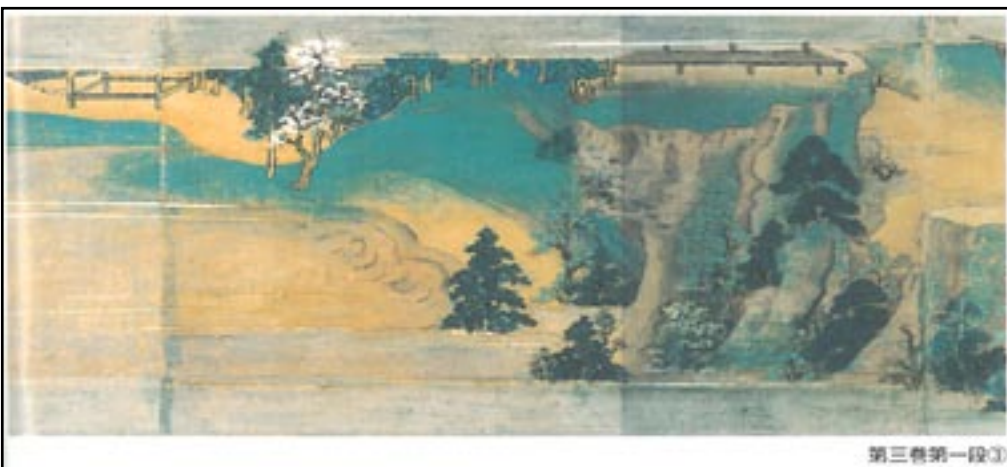
久安三（一一四七）年二月十三日に入洛した勢至丸は、二日後の十五日比叡山に登ることになった。絵伝では比叡山から迎えにきた僧侶や菩提寺菩提寺

から供をしてきた武士などとともに山道を進む姿が描かれている。

比叡山は古代・中世を通じて日本仏教の中心地であり、この一山から法然上人法然上人はじめとして、栄西禅師、親鸞聖人、道元禅師ら、鎌倉新仏教の興隆に尽くした人々が修行をしたところでもある。

西塔の常行堂や黒谷は浄土宗にとっては聖地といってよい。法然上人は最初この西塔の北谷で生活していた源光上人との関係を結んだのであった。

武士の子として生まれた法然上人は、当時世間の最高の道徳であった「父親漆間時国の仇を討つことを止めて」僧侶になった。いくら父の遺言とはいっても、この遺言を守ろうという気持ちになるまでは、かなりの時間を必要としたことであろう。さらに涙にむせぶ母との離別は、十五歳の少年の胸に大きくのしかかってきたことであろう。さきを見越した叔父観覚上人に励



第三巻第一段①

まされて郷里を後にし、山深い叡山に登る少年の気持ちはいかにばかりであっただろうか。

釈尊の生涯

釈尊教団

ラージヤグリハの郊外にシャーリプトラ（舍利弗）とマウドガリヤーヤナ（目連）という学識のすぐれたバラモンの懷疑論者が住んでいた。

この二人はとある朝、アシヴァジットという釈尊の弟子が托鉢にまわっている姿に聖者の片鱗を見出したことが動機となって、仲間の弟子たちとともに釈尊の弟子となり、のちに釈尊の高弟となった。

このように釈尊のもとに出家し、弟子となった人たちは、すべて優秀な人たちだけではなく、パンタカ（周利槃特）のような無類の愚かたにぶい男もいた。また弟子のなかにはいろいろな階級の人がいた。

この当時としてこのことはたしかに画期的なことであった。

釈尊はその当時、インドの

社会秩序として存したカーストの制度にもとづく差別的見解を露ほども持つていなかった。生まれによってバラモンなのではない。生まれによって非バラモンなのでもない。行為によってバラモンなのである。行為によって非バラモンなのである。」と説いた。

このことはその人の出身階級の差別によって人を差別するという従来の考えや慣習をうちやぶることであり、人の差別は実にその人自身が行った行為によることを指摘するものであった。

このような見解を持つ釈尊であればこそ、男女の性別階級の高低にかかわらず、弟子として仏教教団の一員一員とされたのである。

シリーズ お葬式

二、臨終

（葬儀のこころ構えと流れ）

臨終に立ち会う。人間の生命がこの世からあの世へと旅立つ瞬間を、自宅で看取ることが少なくなり、病院で亡くなることが多くなりました。

病院で亡くなるとすぐに葬儀屋さんを紹介され、その葬儀屋さんの手配にすべてを任せてしまう、というのが都市部では当たり前になってきています。ましてや核家族化が進むなかで、とても良きアドバイザーであるおじいさんやおばあさんと一緒に暮らしていない、また一緒に暮らしていても、そのおじいさんやおばあさんが、亡くなってしまふことがおおいわけです。ですから、こうした時こそ、遺族があわてず、菩提寺の住職とよく相談して、亡くなった方をお送りしたいものです。

「畳の上で死にたい」と言いますが、家族にとつても、臨終を迎えつつある家族や親戚の面倒を

み、その臨終を看取することは、その方にできる本当に最後のお世話になります。いったい、どのようなお世話が私たちにできるのでしょうか。

安らかに生を終わらせる、このことを忘れずにすべきことを考えてみましょう。

枕経とはこうした臨終を迎えつつある方の枕元であげるお経のことです。室内を清らかにし、また臨終の人の心が乱れることのないよう物音などにも気を配り、来迎仏やお名号の掛け軸や風を枕元に飾って行ってお経です。ですが、なかなか臨終の瞬間にお坊さんに立ち会ってお経を唱えてもらうことが難しいこともあるでしょう。ですが、昔から臨終に立会い合う習わしもありますので、菩提寺の住職に相談されるとよいでしょう。そんなときは、家族や親戚で南無阿彌陀仏とお念仏を称えてあげましょう。

看取る人全員で低声で念仏を称え、来世に向かおうとする人に一度でもよいのですから、南無阿彌

陀仏と称える力を出させてあげるようにできれば、それ以上の功德はないでしょう。そして、本当に臨終の瞬間が来そうな時には清らかな水を用意して、綿または筆で当人の唇を潤してあげます。いわゆる末期（まつご）の水です。また病のせいなどで死苦にせまられている時などは当人の手をしっかりと握り締め、阿彌陀さまのご加護を祈りましょう。辛い病苦に迫られず、静かに臨終を迎えることができるならば、死期を悟った当人の最後の言葉を聞き漏らさないようにしたいものです。

さらに、臨終の瞬間をとらえた善導大師の『発願文（ほつがんもん）』を静かに朗読することも、当人のこころを落ち着かせるとともに、看取る側のこころも落ち着くことでしょう。

出典 浄土宗ホームページ



筑後西国三十三観音霊場
第十八番札所
聖観音菩薩

開眼式のご案内

平成24年11月23日
午後1時より

まもなく完成します。



鑄込まれる銅板



観音様の鑄造風景



観音様の蓮台でしょうか？

数年来檀信徒の皆様方には、写経奉納、銅板志納、でご協力いただきありがとうございました。また篤信のみなさまにはご志納金を納めていただき重ねてお礼申し上げます。

聖観世音菩薩像の建立は単に完成することだけが目的ではなく、これから多くの方に参拝していただき、写経納経や観音霊場巡りなど、お慈悲の光に触れていただける機会が増えることと思います。

就きましては、来る11月23日お十夜法要の日に開眼供養をいたしますことをご案内して、感謝のことばに替えさせていただきます。合掌

香林山 冷智院 無量寺 第二十三世 秀誉 俊翁

写経納経料	903,000 円	
銅板、真鍮板志納	1,116,000 円	
特別志納金	4,324,000 円	
計	6,343,000 円	10 月末日まで

お像および台座、周囲の環境整備等含めまして、約 10,000,000 円かかる予定です。
写経やご志納は今後とも引き続き、受けけますので、よろしくお願い致します。



院号授与式

秋季彼岸法要の折

おふたりが院号を受けられました。

慶雲院 吉田 静子 殿

清心院 中原 雅子 殿

おめでとうございます。これからも念仏道ご精進くださるよう祈念いたします。